



仁寿山図
姫路市野里 金井利孝藏

為水遊於
觀於海者難

才であった。
雲平はこの山図で学んでいたと
き一編の漢詩を詠んでいるので紹
介する。

今より百七十年前に、仁寿山図
が開かれた。此の年龜山雲平は生
まれた。

河合寸翁は仁寿山図を創立する
に当つて、藩主酒井雅楽頭忠實に
差出した上申書に、「(前略) 実
に得難きは人材、一時千頃(三
〇〇万坪) の田、万金(大金) の
宝を以て購われ候とも、一人の賢

材を得られ候らえば、所謂、安富
尊栄、たゞ千頃の田万金の宝のみ
に止まり申間敷く、誠に以つて人
材を教授や講師に招いた。頼山陽も
その内の一人である。

佐幕派の姫路藩より多くの勤皇
の志士はこの仁寿山図より輩出し
た。

龜山雲平は、仁寿山図閉校後
三十一年目、明治六年(一八七

龜山雲平顕彰会

代表長野哲

百年後の学脈

龜山雲平の教えと

材は國家の大宝と存じ奉り候故云々」
と述べている。



題字 龜山雲平
編集: 龜山雲平顕彰会
発行: 長野哲
住所: 姫路市木場
前七反町39番地
八家土地興産㈱内
電話: (0792)45-0015
印刷: 浜谷印刷株式会社

天保十一年八月二十八日
仁寿山図に於て 龜山雲平

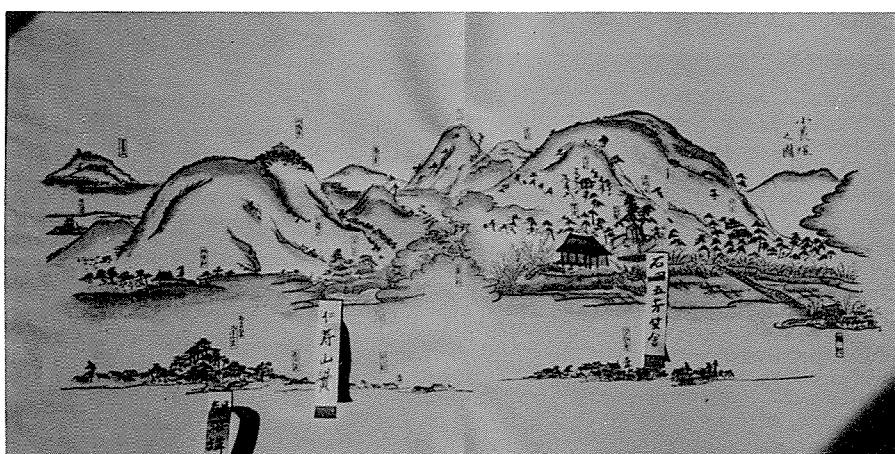
茗水曾遊年幾更
又將餘業向山図

紅樹青松亦弟兄

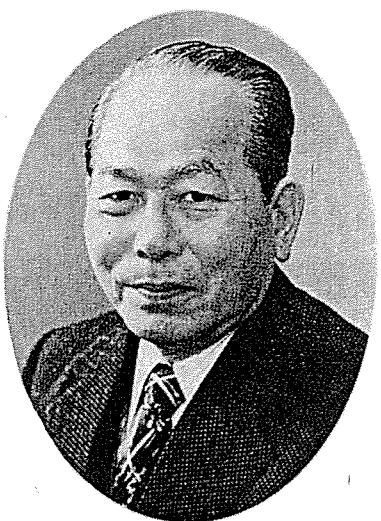
小道ヲ以テシ難シ。

以上は觀海講堂と名付けた意義
であり、このような教義と理念を
觀於海——海ヲ觀ルモノハ、大水
ヲ知ル。故ニ之ヲ説クニ、小水ヲ
以テシ難シ、聖人ノ門ニ遊ブモノ
ハ大道ヲ聞ク、故ニ之ヲ説クニ、
ハ大道ヲ以テシ難シ。

聖人之門者難為言



仁寿山図付近の図



元姫路市長 吉田豊信

静養につとめたが、遂に還らず、数年前に他界され故人となられた。然し生前に残した数々の功績は大きく永遠に不滅である。雲平の教えた「國家一旦の用に役立つ人材」であった。

岡田重成は、観海講堂の門人で、雲平の愛弟子として一生懸命学び、卒業後栗生小学校の教員となり後であつた。

岡田武彦

岡田重成は、観海講堂の門人で、雲平の愛弟子として一生懸命学び、卒業後栗生小学校の教員となり後であつた。

岡田武彦

岡田重成は、観海講堂の門人で、雲平の愛弟子として一生懸命学び、卒業後栗生小学校の教員となり後であつた。

岡田武彦

以て「國家一旦の用に役立つ人材」の養成教育を実行していった。

講堂には、孔子を祀り、朝一同礼拝してのち、熱い茶をすゝってから、雲平の講義が始まったといわれている。

孔子

一自尼山生此神、傳來明徳与新民
章々却是平常語、始識聖人非別人
百年を過ぎた今日まで、雲平の
教えは受継がれ、地域発展と社会に寄与するもの誠に大いなるものがある。

雲平の門人として、親しく薰陶を受けた父を持つ二人の消息を紹介してみよう。

吉田豊信



九州大学名誉教授 岡田武彦

人達がその教えを受け、日本有数の大儒学者である。武彦には多くの著書があり、「中国五千年史」、「座禅と静座」、「東洋の道」、「楠本端山全集」、「池田草庵全集」、「我が半生儒学者への道」など大著の出版は数十篇に及んでいる。又著書の一部は英語などに翻訳され、外国でも多数出版されている。

亀山雲平の生まれた。

亀山雲平の書を掲げ、この書を見てかわりではないかと思われる硯儒である。

亀山雲平の大信奉者であり、戦時中空襲の時でも雲平の著

書を肌身離さず持っていたと言われていた。

る。

雲平の「國家一旦の用に役立つ人材」と教えた門人の子息二人が共に、地元松原村と中村より出で大政治家と、教育者として活躍している

のを想うとき、さきの河合寸翁の教えと亀山雲平の教育目標

が共に、すばらしい「先見の明」に心から感服するものである。



岡田武彦先生の著作

亀山雲平の

「白浜村役場新築開場祝文」

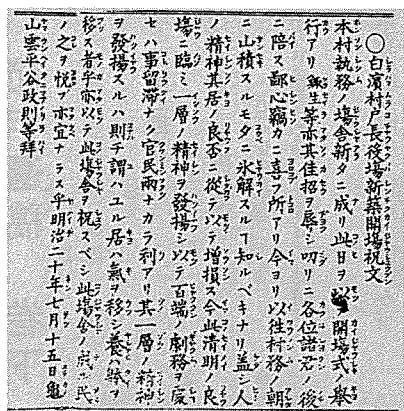
島田 清

一、

明治二十年七月十五日、白浜村戸長役場が新築開場した。戸長役場といふのは、明治十一年（一八七八年）より同二十一年までの間、町村役場に付けられていた名である。従来の大区・小区制を明治十一年に廃止し、新しく郡区町村編制法が施行されることとなつて現れた名である。

二、

亀山雲平は、白浜村戸長役場の新築開場式に招かれ、祝文を読ん



「記事論説作例軌範」の祝文

明治二十年七月十五日
白浜村戸長役場新築開場祝文

前回の例にならって、文中のむつかしい用語を説明しておこう。

前回の例にならって、文中のむつかしい用語を説明しておこう。

前回の例にならって、文中のむつかしい用語を説明しておこう。

「場所」——耳馴れぬことばであるが、文字を見て、あるが、文字を見て、「場所」という意味であることは、すぐ

「鰯生」——「鰯」は小さい魚のこと、したがつて「小生」が、たんに察知できよう。

「鄙心」——「鄙」はもと、周の行政上の「区画」を指したことばで、五百家ある地の称である。のち、転じて、「いなか」（田舎）の意に使われ、「いやしい」という意味やしい」という意味にも使われた。これらから、「鄙心」は「いやしい心」といふことになるが、この「小生」と同じく、自己をへりくだつていうことばとして用いた。

「小生」——「小生」の意味にとどまらず、自分のことを、へりくだつた形でい

「小生」——「小生」の意味にとどまらず、自分のことを、へりくだつた形でい

以上のはかは、特に説明を要するほどの語ではなく、読むにしたがつて意味が了得できる。「役場の新築開場式」といったいわば、きまりきったような式典の祝辞であるから、特別に述べることも少な

「小生」——これも耳馴れぬ語であるが、文字を見れば、「御招き」の意味であることがわかる

「蓋シ」——「叨」という字の本來の意味は「食り食べる」であるが、「かたじけなし」という訓もあるので、その意に用いている。

「鄙心」——「鄙」はもと、周の行政上の「区画」を指したことばで、五百家ある地の称である。のち、転じて、「いなか」（田舎）の意に使われ、「いやしい」という意味やしい」という意味にも使われた。これらから、「鄙心」は「いやしい心」といふことになるが、この「小生」と同じく、自己をへりくだつていうことばとして用いた。

「刺させ」——「刺」とさせ、「勇敢・真摯」、かつ、「速・適切に業務を遂行する」ことを期待し、希求したのである。

「白浜村の一角に、こうした指導をしてくれる雲平が居住していたことは、村民にとって、大きな幸

「蓋シ」——「人ノ精神、其居ノ良否。亦、以テ、此場所ヲ祝ス。此場所ノ成ル、民ノ之ヲ悦ブ、亦、宣ナラズ乎。」

「謂ハユル居ハ氣ヲ移シ、養

否ニ從テ以テ、増損ス」

「謂ハユル居ハ氣ヲ移シ、養

否ニ從テ以テ、増損ス」

「雲平、谷政則等挙。明治二十年七月十五日、亀山

「かたじけなし」という訓もあるので、その意に用いている。

「謂ハユル居ハ氣ヲ移シ、養

否ニ從テ以テ、増損ス」

の一節と、

節字遺稿 卷下 詩

人間世界には是非の事がある

が、そんなことはどうでもよい、

まあ行楽を楽しんで一生を送る

う。

2、尾聯に、「遮莫 人間是非の事」に、困ることや嬉しいことなどあろうが行楽を生涯のこととしようとするうたい方は、日本人はなれた老莊的な愉快な生活

唯將行樂作生涯。唯將行樂作生涯。唯將行樂作生涯。
酒を売る家。
遮莫人間是非事、遮莫人間是非事。
是

(第二回分)

4. 信歩・近郊

七言律詩 (下平声・庚韻)

近郊を歩む

城東雨歇夕陽斜、

城東の雨歇み、

夕陽斜めに、

語釈 (1) 詩題の「信」は意味が通じない。誤字であろう。

(2) 歌「やむ」と読む。雨が降りやむ。

(3) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

(3) 蔡驥 ろばとまよ」というよう

(4) 短旆 短い旗とまよ」というよう

(5) 遮莫 「さもあらばあれ」と読む。「どうあろう

再び拜む。

5. 藤肥州拜富岳圖

藤肥州 富岳を拜する図

正しい。霍嫖姚は漢の

勇将で、本名は霍去病

といい、匈奴をゴビ砂

漠まで追いつめた。

(1) 詩題の「藤肥州」とは、加藤清正のことである。「富岳」も「富

峯」とともに、富士山をいう。

(2) 懸軍 遠地や敵地の奥深くまで進攻した軍隊。

(3) 霍嫖姚 「鶴」は「霍」が

正しい。霍嫖姚は漢の

勇将で、本名は霍去病

といい、匈奴をゴビ砂

漠まで追いつめた。

(4) 遺方、「ハルカニマサニ」と読む。

(5) 九霄 大空をいう。

1、萬里懸軍鐵馬驕り、萬里懸軍の鐵馬

この詩の特徴

1、萬里懸軍」とは、加藤清正

が遠く渡鮮進攻したこと

2、萬里懸軍鐵馬驕り、萬里懸軍の鐵馬

この詩の特徴

1、萬里懸軍」とは、加藤清正

が遠く渡鮮進攻したこと

が遠く渡鮮進攻したこと

</div

2、この詩の題目は第四句にある。
ます第三句に、「遐かに方に
王家の徳を示さんと欲して」と
言い、豊臣家の徳光を海外に輝
かそうとしていて、その精神的
支柱を第四句の「富峯の九霄を
凌ぐ」英姿に求めて、それを
「再拜した」ことにある。富士
山の勇姿を仰いで、朝鮮進攻の
精神を鼓舞したことを詠じよう
としている。

ところが、欄外に重野成齋は、
ただこの詩を「綺麗平凹」と評
しているが、それは富士山の大
空を凌ぐ美しさを再拜したと理
解しているのであって、大きな
誤りである。

6、觀牽牛花

牽牛花を観る。

七言律詩（上平声・支韻）

軟性風前難自持、軟性
風前にも自らを持ち難く、

清晨和露托疏離。清晨
露に和し、疏離に托す。

花因易落墜愛花は落ち易きに
因り尤も愛に堪え、

香爲無多亦足奇。香多無しと為
すも亦奇に足堪え、

(4) 飛
蝶
蝶と同じ字。

(1)、
(2)、
(3)、
(4)

朝顔はなよなよしてい風が
吹くと自分の形を保ちにくく、
身をあずけている。

愛らしく、花の香は少いが珍奇
である。

葉は天の川の水に染められて
紺碧色であり、蔓は錦の糸を引
いている。

3、五・六句の対句に、句の構成
上見るべきものがあるのだが、
それ以上に両句の着想を賞めた
い。

秋になると庭一面を占領して
いるが、蝶も蜂も決して飛んで
こない。

葉の紺碧の色を「銀漢の水」
の染め成す業だと言、蔓の延
びるのを「錦機の糸」の引くこ
とに比定するのは、豊かな詩的
着想の結果である。

4、以上の表現上の長所に比べて、
尾聯の着想は、あまりにも平凡
である。結辞としての発想の工
夫が欲しかった。

糺碧染成銀漢水、紺碧染め成す
蔓延引得錦機絲。銀漢の水、
機の糸。
一庭領取秋佳處、一庭秋の佳處。
飛蝶狂蜂總不知。飛蝶も狂蜂も總
て知らず。

朝顔はなよなよしてい風が
吹くと自分の形を保ちにくく、
身をあずけている。

2、朝顔の全体的な特性で、「軟
性」風前にも自らを持ち難く
「疏離に托す」というのは、誰
もがよく見聞するところである
が、そのなかで「軟性」の語が
朝顔の特長をよく表しており、
身を「疏離に托す」にうまく特
性を言い当てている。

顧公幼時嘗執「經於吾先考」。
夙馳「好文之譽」今又有「斯舉」。
忠学は幼時先代の大学頭衡に執
經（師に従つて業を受けること）
好学の人であった。更に詩縁を出
刻するの事業を行う。また學問を
尊び益信信用がますにその心を用
ふることが篤いと讃えている。

則是書之出、心知皆争購競獲、
壬寅の夏。天保十三年六月のこ
時月之間、殆將遍布寰宇、其有
嘉惠後學、就謂匪「公之賜」耶、
雖因抒手樂而序之。

この書が世に出ると獲得に争つ
て購い、僅かの間に、寰宇世の
中に遍布。後學の人達えのよきめ
ぐみは皆公の賜ものと謂う。雖、
先生と相談、華谷嚴氏の註する毛
詩（詩經の別名）すなわち詩緝の
翻刻を定めた。

(5)、總不知總ては、下の不知
を強調する。「決し
て」と訳してよい。

糺碧染成銀漢水、紺碧染め成す
る。
銀漢の水、
機の糸。
一庭領取秋佳處、一庭秋の佳處。
飛蝶狂蜂總不知。飛蝶も狂蜂も總
て知らず。

飛蝶狂蜂總不知。飛蝶も狂蜂も總
て知らず。

この詩の特長

うたつた好詩である。

命翻雕之

屬者は近時、姫路藩主酒井公が

明暫

繫は札

版木

開版した書

月、大學頭號敬撰と結ばれている。

三承前

屬者、姫路源公獲明槩一善本

す語

閑蓬は甲、執除は辰、季秋

天保十五年龍集（年号の下に記

濱嶋敏雄

雲平校定読合の詩緝

募其善本、聞愛日樓有舊
儲、因借賢之、則字畫端正、
とあるように、善本を広く求めた。
愛日樓が古い書籍を蔵していると
聞いたのでこれを借りてみると、
字画も端正な正本であった。愛日
樓とは佐藤一斎である。一斎は雲
平の師であり、また大学頭の師で
もあった人である。当時七十歳の
高齢であった。忠学は一斎と旧知
であったので、礼を厚うしてこれ
を求めた。

老人割愛見贈 余喜可知也、

過命待臣重加釐正、遂就翻
雕焉

一斎老が割愛して贈ってくれた。
喜び知るべし。過命待臣に命じ更
に念を入れてこれをただし、遂に
翻雕(刻)の緒に就いた。

忠学は更に述べている。

毛詩之解、朱呂二家註本、早己
鐫行。

朱(朱熹)呂(呂祖謙、東萊説
詩記の著者)の註本は早くから刻
刊されている。嚴氏詩緝は博綜、
ひらくおさめられている。而舶齋
不多。然し、中國からの輸入が
少ないので容易すく手に入らない
ので学者は心やすからず思つてい
る。今度入刻したから、経書を望
んでいる士のたすけになることを
庶幾つ。

大府之礼、鄙夷之私、一舉兩得
之也。滋爲可喜矣、剖廟告竣、
乃題簷言如此

幕府憲板の令、鄙の中の私の思
いが共に適った。これこそ一舉兩
得である。ますますの喜びである。
剖廟、版木も刻り終わつたので、
かくの如く多言を題した、と結ん
でいる。

天保辰甲(十五年)三月、姫路
城主源忠学

五

忠学が詩緝の発刊を決めたのは、
天保十三年(一八四三)、完成し
て將軍家の献上が弘化二年(一

八四六)、翻刻にかけた時日は五
年である。

雲平が詩緝の校定を命ぜられた
のが嘉永三年(一八五〇)、刊行
されて四年後である。校定とは書
物を較べ合わせて正すこと。四年

の後になぜこのような作業が必要
になったのだろうか。

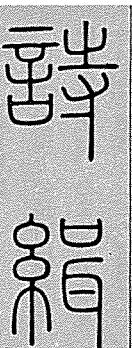
誤刻が発見されたのかの詮索は別にして、これだ
けの大部な難解な典籍の校定、実

に地味な仕事、雲平の学識と人柄
ならではと私は思う。

雲平は元來地味な人柄だったと
思ふ。

朱(朱熹)呂(呂祖謙、東萊説
詩記の著者)の註本は早くから刻
刊されている。嚴氏詩緝は博綜、
ひらくおさめられている。而舶齋
不多。然し、中國からの輸入が
少ないので容易すく手に入らない
ので学者は心やすからず思つてい
る。今度入刻したから、経書を望
んでいる士のたすけになることを
庶幾つ。

味經堂原判



詩緝中扉

へ高官が駕を屈げて来てく
れたとの対句である。言外
の喜びを賦したものであ
る。枉高軒との表現、
全く村儒になりきっている。
三十歳後半から五十歳近くまで
この間こそ、学問専一に打ち込んで
おれば更に円熟して学識が豊かに
なっていたろうに、身も心もすれ
きり疲れきって廢藩を迎えた雲平
の心は如何ばかりだったか、思
に余りある。

蠹冊 この難語から想像を逞し
ゆうする。嘉永六年に昌平坂学問
所を退いた。忠宝が僅か二十五歳
の若さで卒し、忠顯が後を継いだ
のが十二月一日である。ここで雲
平は忠顯に重く用いられ、待講か
つ側近のようになつたのではなか
ろうか。

この忠顯も若くして逝き忠續の
世になる。文久元年に大目付を仰
せつけられる。更にこれから明治
四年の廢藩に至るまで姫路藩は多

くある。

元々地味な人柄、加えてこの状況
である。隠居もしたくなる心境に
なるであろう。江戸表からの華や
かな数々の誘いにも見向かず、何処
でもよい適當なところがあれば隠
遁したい想いであったのであらう。

け、時には塾生の帰省の旅費をも
救けるために使い、己の生活は必
ずしも豊かであったとはいえない
という。

当世はとかく自己中心的で、他
人との関わりが薄れている。また、
生活は消費が美德とされ、華美に
流れてる。バブルのはじけた今
日、この雲平の逸話を思い、自分
の生活を見直してみたいものであ
る。

節宇逸話(五)

先生身ヲ奉ズルコト節儉ニシテ
常ニ綿服ヲ着テ満足セラレ若シ親
ザリト云フ

これは、白浜の米沢菊次の紹介

する雲平の逸話であるが、質素儉

約を旨とし、服装も木綿で満足し

る。雲平の生活をよく伝えてい

ていた雲平の生活をよく伝えてい

る。質素儉約もただ守銭奴のごと
く金を貯めることに徹したのでな
く、金は親戚や旧知の友は勿論塾
生の生活にも目を配り、これを救
る。

(大西文雄)

姫路藩藩校

好古堂

一、好古堂の

創設と沿革

1、好古堂の創設

姫路藩（酒井氏）の藩校である好古堂は、酒井氏が姫路に転封になつてから出来たものではない。

前任地である前橋（鹿橋）時代の元禄三年（1691）、学問を好み藩士の教育に熱心であった藩主酒井忠挙が儒者斎藤才次郎（丹波国出身、林羅山の門弟）を食禄二百五十石で藩に招聘し、翌元禄四年城内三の曲輪の長屋を講堂に利用し、『小学』を松尾弥五左衛門（生國不詳、元僧侶であった）を十五口俸（後、百石）で招聘し、『論語』を講義させ、元禄五年藩校としたものである。

藩校とは、江戸時代（明治四年の廢藩置県まで）に藩が藩士の子弟を対象に開いた官立の教育施設をいい、明治二年現在の二百七十六藩のうち、資料を欠くため藩校の存在が不明瞭な二十一藩を除く二百五十五藩が設けていた。（但

(一)

大西文雄

し、三十六藩は明治になつてから藩校創設である

藩校創設に至る過程としては、①聖堂の建立や孔子祭の挙行

が契機となり、藩校創設につながつたもの②家塾からスタートし、家塾を藩校にしたもの③講釈の講堂が藩校となつたもの

曲輪の長屋を講堂として、『小学』を講義させたことにその始まりが見られるからである。

それでは藩校はいつごろから創設されたのであろうか。国史大辞典の藩校一覧から元禄4年宝永年間（1691～1704）までに創設された（六八～七二）になり、姫路藩の好古堂は藩校

になり、姫路藩の好古堂は藩校

を創設した二百五十五藩（但し四校は創設年代が不明）のうち六番もの早さになる。

2、好古堂の名称由来

「孔安國尚書序」若好古博雅君子與我同志亦所不隱也

（もし博雅の君子古を好ばば、我と志を同じにして亦隠れざる所也）

好古堂の名稱は、どのような由来からきているのであろうか。現存する資料には何も記していない。

しかし、一国の藩校である。何の謂れもなく命名したとは思えない。

そこで『大漢和辞典』を見てみると、

好古・古のことをこのむ。昔をしのび慕う。

また、好古堂の見出しがあり、清、姚際恒の室名である。

姚際恒とは、中国清の時代、浙江仁和、県の諸生をしていた人である。生年、没年およびその生い立ちについては不明であるが、著書に『古今偽書考』、『好書堂書目』、『書画記』、『九經通論』、『庸言錄』があり、字は立方という。

好古堂の由來が、このどれによるものかは不明であるが、好古堂で朱子学を中心とする儒学を教えいたことを考えると、これら中國の故事情によつたと考えて大きく間違つてはいなだらう。

と意味を記した後に、「論語述而」述而不作 信而好古（述べて作らず、信じて古を好む）

表1 元禄から宝永年間に創設された藩校

国名	藩名	藩校名	創設月日	創設藩主
尾張国	名古屋藩	学問所	寛永年間（1624～1644）	徳川義直
備前国	岡山藩	花畠教場	寛永18年（1641）	池田光政
肥前国	大村藩	学校	寛文年間（1661～1673）	大村純長
陸奥国	会津藩	講所	延宝2年（1674）	松平正経
対馬国	府中藩	小学校	貞享2年（1685）	宗義真
播磨国	姫路藩 (上野国鹿橋時代創設)	好古堂	元禄4年（1691）	酒井忠挙
摂津国	三田藩	国光館	元禄7年（1694）	九鬼隆国
讃岐国	高松藩	講堂	元禄15年（1702）	松平直常
美濃国	岩村藩	知新館	元禄年間（1688～1704）	松平乗紀
丹波国	亀山藩 (丹波国篠山時代創設)	不明	元禄年間末（1688～1704）	松平信庸
三河国	刈谷藩	文礼館	元禄～宝永年間（1688～1711）	土井利意

亀山雲平顕彰会総会記



二月八日飾磨天守閣において、話題の中において再燃し、この度九州大学名誉教授岡田武彦先生との開会の運びとなつたので、姫路の二方をお招きいたし、更に有本芳水の研究で名も高き文人代議士姫路女子短期大学教授島田清先生の後藤茂先生の御出席を戴いて開催した。それに姫路師友会、姫路木鶲クラブの方々の参加を得て七十名を越す盛会となつた。

もとへこの企画は姫路師友会と共に昨年末に開催を決めていたが、岡田先生の突然の御不列があり中止の止むなきにいたつたといふ経緯があった。

一月上旬姫路師友会の方々と博多の岡田先生を訪ねた際、種々の

姫路師友会の皆さまがたのお骨折りにてあります。扱、両先生には講演をお願致いしてありましたので、先ず島田先生が「播磨聖人亀山雲平」という演題のもと、雲平の家系、人となり、事跡などに加えその時代背景として姫路藩主の資質などにも触れられたり得意の話術で、聴く者はその時間不足を歎じた。

次いで、岡田先生「論語の本質は思いやり」にあるとの話、論語と思いやりの精神の結び付きなどを思ひ及ばなかった。論語と言えば難解なものだと思いついたが、先生の噛み碎いたお話により、もう一度論語の勉強と思う程引き付けられる話振りであった。

講演の後、直ちに歓談の時となり、出席の皆さんが島田先生に種々質問されたよう、先生がこの会のようにいろいろ質問を受けることは話題があり、喜ばしいと長野会長に漏らされたとか。

この総会のもう一つの目的、そ

の開会の運びとなつたので、姫路の二方をお招きいたし、更に有本芳水の研究で名も高き文人代議士

姫路女子短期大学教授島田清先生の後藤茂先生の御出席を戴いて開催した。それに姫路師友会、姫路木鶲クラブの方々の参加を得て七十名を越す盛会となつた。

もとへこの企画は姫路師友会と共に昨年末に開催を決めていたが、岡田先生の突然の御不列があり中止の止むなきにいたつたといふ経緯があった。

一月上旬姫路師友会の方々と博多の岡田先生を訪ねた際、種々の

質問されたよう、先生がこの会のようにいろいろ質問を受けることは話題があり、喜ばしいと長野会長に漏らされたとか。

この総会のもう一つの目的、そ

亀山雲平の書によせて

はあるが運筆はゆっくりと心をこめた線を引き、余白を生かしての

書作であったと思われる。書作品

の中では作者の小品を見るときが私

は一番好きである。雲平の書作品

は数多くあるが、小品の中にはこそ

其の時々の心の動きまた作者自身

の本当の姿が現れると思っている。

今回私は摺扇作品を取り上げることにした。この作品は摺扇に余白

を生かした情懷豊かな運筆で感性

の豊かさを見せており、一本の線

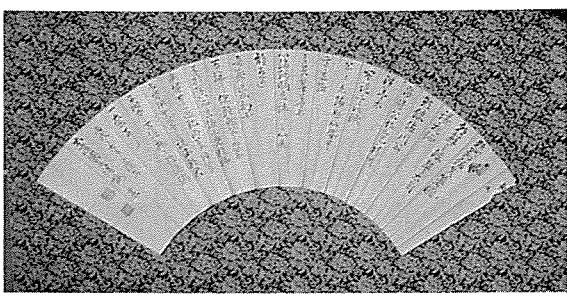
にも無駄もゆるぎもなく、扇形の

美しさをあますことなく生かしている。小品ではあるが味わい深い

作品である。

尚、この書は木場村木庭神社宮司で雲平の門人で医者でもあり、

師雲平の主治医である木庭主計好之に与えた扇面である。



あるが運筆はゆっくりと心をこめた線を引き、余白を生かしての書作であったと思われる。書作品の中では作者の小品を見るときが私は一番好きである。雲平の書作品は数多くあるが、小品の中にはこそ其の時々の心の動きまた作者自身の本当の姿が現れると思っている。今回私は摺扇作品を取り上げることにした。この作品は摺扇に余白を生かした情懷豊かな運筆で感性の豊かさを見せており、一本の線にも無駄もゆるぎもなく、扇形の美しさをあますことなく生かしている。小品ではあるが味わい深い作品である。

尚、この書は木場村木庭神社宮司で雲平の門人で医者でもあり、

師雲平の主治医である木庭主計好之に与えた扇面である。

池田善彦